

2 50年史の制作

2.1 50年史制作の趣旨

2.1.1 30年史と40年史を振り返って

当協会は1979(昭和54)年に創立30周年を迎え、同年11月21日に「30周年記念祝賀会」(写真1.1:次ページ参照)を催し、同日付で「日本溶接協会30年史」を発刊している(写真1.2参照)。なお、この30年史には「近代溶接の歩み」という副題が付けられており、ここで示されているように、当協会設立の1949(昭和24)年以後の我が国の溶接は、戦後の復興を担うに相応しい溶接近代化への道を歩んできている。



写真1.1 1979(昭和54)年11月21日の「創立30周年記念祝賀会」のもよう

当協会創立当時の主要な人たちの中には、すでに鬼籍に入られた方も少なくない。その方々の多くが戦前からの「溶接屋」であるが、技術屋として必ずしも恵まれていたとはいえない戦前の社会環境、つまり「溶接屋」は変わり者という見方の世の中であって、溶接の将来をひたすら信じて進んでこられている。

戦後、その方々の信念の正しさは証明され、さらに溶接屋は時代の花形となった。戦後米国の溶接協会の情報を得て、彼らの活動のセンターとなる米国タイプの当協会の設立に夢を託したと思われる。そこには、かつての軍の制約も行政の枠もない民間の自由な晴舞台が用意されていた。

この創立当時の輝かしい思いを込めて詳述されたのが30年史である。この中では、創立当時の様相が具体的に示されているので、当時を知らない現在の溶接関係者に、創立当時の希望に満ちた人々の苦勞と努力を、その記述を通じ少しでも汲み取って欲しいと思う。



写真1.2 「日本溶接協会 30年史」



写真1.3 30年史を土台としてその後10年の発展史を積み重ねて、将来の溶接技術の繁栄を期待するとして編集されている「日本溶接協会40年史」

「日本溶接協会40年史」(写真1.3)は、30年史を土台としてその後10年の発展史を積み重ねて、将来の溶接技術の繁栄を期待するとして編集されている。

40年史は1989(平成1)年11月24日発行されたが、30年と50年という半世紀の間にも当たるので簡潔な文体となっている。40周年記念事業開催の当時は、我が国経済はバブル景気に浮かれた時代であった。

製造業では、いわゆる軽薄短小型の産業が時代の寵児となり、溶接量の多い重厚長大などは、もはや時代遅れとされる傾向があった。その一方では、好景気のために人的資源が枯渇し、これを補うための溶接ロボットが急速にもてはやされた時期でもあった。

「溶接」という名称も新鮮味が薄れ、代表的な3K職業を連想させることもあってか、若年層からは溶接を職業とするのを避ける風潮も出てきた。また、大学や研究機関それに企業内でも、溶接と名のつく組織が次第に消えてゆき、40周年の当時は「溶接屋」にとって多少失意・焦燥気味の時代であった。

2.1.2 50年史の発刊環境

さて、50周年にあたる今日の環境はどうか。一言でいうならば外国からの黒船到来によって鎖国が解かれ、開国に向かう時代に似ているように見える。黒船の第1船はISO 9000シリーズに端を発する溶接品質のための国際溶接要員資格制度の導入である。

欧米では、我が国のように重厚長大から軽薄短小時代に移り、「溶接」の看板が消えるというような事態には至らず、昔同様溶接の重要性が認識され、溶接専門職の価値・評価は現在も変わらない。

したがって、欧米に代表される国際的な品質システムの我が国への導入は、溶接重視の標準も同時に取り入れることを意味し、これによる行政面での溶接への対応に変化が出はじめたことである。

もう一つの黒船効果は、世界に通用する溶接技術のプロが、我が国でも欧米と同様に重用される社会への改革である。このことは溶接を専門とする職業の人たちに社会的地位の向上と生活の安定をもたらし、また終身雇用制度崩壊への対応にもなっていると思われる。

溶接を目指す人が増えれば、我が国の産業にとって大きなプラスとなり、我が国の経済にとっても歓迎すべきことである。これはまた、当協会の会勢拡張にもつながる。

当協会は1999(平成11)年3月9日付で(財)日本適合性認定協会(JAB)から溶接要員認証機関として認定された。これにより従来の当協会の検定・認定はISOの認証に代わる気運が出てきたのである。

さらに近い将来、IIWスキームが導入されることになると、世界にそのまま通用する要員が我が国で生まれることになる。この10年はまさに、このような国際化に向けての準備が進められてきた10年といっても過言ではなく、今回の50年史はこのような意味合いからも特別なものになると考える。